を垂れ、後進を激勵する點にて喜ぶべきことである。本書は遺著の第四册に該當するもので、書名の通り檀君考・箕子朝鮮傳說考・洌水考・眞番郡考・百衲本史記の朝鮮傳に就きて・大同江南の古墳と樂浪王氏との關係・加羅疆域考・已汝伴跛考・高句麗五族五郡考・廣開土境好太王陵碑に就て・朱蒙傳說及老獺稚傳說の十一篇の不朽の名篇を收載する。此の中の大部分は實に學位請求論文として心血を濺がれたるもの、原原本本の研究の典範としても貴重なるものなるのみならず、朝鮮史學の學問的確立の礎柱として永へに沒せざるものと謂へる。刊行に當り岡版として權近應制詩註・百衲本史記・樂浪大守掾王光印影・鈔本新增東國輿地勝覽・鈔本翰苑の五葉を加へられたる編纂者の用意も感謝に堪へぬ。卷頭の博士肖像は昭和二年十月の撮影に係り、晩年近くの風丰を仰ぐに無二のもの、私は遺像を仰ぎ、遺著を讀みて博士の德音を偲ぶや甚だ切なるものがある。(菊版五一〇頁京城府長谷川町七四・近澤書店發行・價四・五〇圓)(那波)

○蒙古學創刊號

蒙古に對する正しい認識を得んが爲には學術的にあらゆる視野から研究することが必要である。かゝることは我が國に當然行はる可くして未だ充分な發達を見ないのは自他共に認める所で此缺陷を補ふことこそ刻下の急務でなければならない。

惟ふに、蒙古民族が曾つて遂げた空前絶後の大活動は東洋史上の偉觀であつた。其點からジンギス汗を指導者として勃興した彼等の行績に就いては今日已に相當研究されて居る。然し乍ら蒙古自體の研究は固よりこれに止まる可きではない。卽ち蒙古の研究は單に文化的のみならず自然科學的にも行はれなければならないのは言ふ迄もあるまい。然るに前者の研究は今日猶不充分であり、後者の如きは殆んど未開の儘に放置されて居る有樣と云ひ得やう。されば此等の究明こそ本邦學徒に課せられた責務である。それにも拘らず未だ研究結果の專門的發表機關すら缺けて居た。今度善隣協會に依つて發刊を企てられた雜誌「蒙古學」はこの缺陷を補はんとするの目的に出たもので、その時宜を得た企てに對し斯學の爲慶賀を表し度い。

偖て創刊號の內容を見るに、論文としては「世界史に於ける蒙古の地位」(白鳥庫吉)「勅勒の內徒に就いて」(志田不動麿)「元代色目人に關する一考察」(愛宕松男)、其の他「烏丹城附近に元碑を探る」(田村實造)「フルン・ブイル地方の考古學的遺跡」(三上次男)「ホロンバイルの蒙古語」(服部四郎)及び講座としては「蒙古遊牧民とその歷史的役割」(松田壽男)「蒙古語文語格梯」(竹內幾之助)があり、これに書評・論著紹介等の欄が設けられて居る。通じて見るに、歷史言語關係の論文が主で、蒙古に於ける自然科學的研究の貧困は言はずして此處にも反影して居る。今歷史關係のものゝ二三に就いて其梗概を紹介しやう。白鳥博士の論旨は歐羅巴の歷史に現はれた遊牧民の侵略の動因には常に蒙古民族の活動が働いて居るとし、彼等の活動の結果、其の西隣のトルコ民族が壓迫され、この影響が更にイラン系の

騎馬民族に及び遂に民族移動として現はれるに至つたことを敍し、かゝる動因となつた點こそ蒙古の持つ世界史的な意義であるとされて居る。愛宕氏の論文は元代に於ける色目人の歴史的意味を究明されたものである。先づ色目人の定義を明かにし、其内容は蒙古支配下の非漢文化民を指すものと斷じ、更に陳垣氏が色目人の華化乃至華化的傾向のみを重視して居るのを非とし、これを言語・文字・本俗法・宗教・學術等の諸方面に亙り、難解の元典章等を驅使して檢討した後、當代の色目人は色目文化の擔當者として、漢文化の擔當者たる漢人と對立的存在を續けて居たことを力説し、而して色目文化こそ元朝の蒙古至上主義の背景となり、或はその支柱となつたものであると結んで居る。松田氏の講ずるところは、蒙古史は蒙古民族史と同一視すべきものではなく、蒙古地方に生起した歴史的諸現象を把握するところに成立するとの立場に立ち、先づ遊牧民の生活形態を敍べ地理的事情を記し、進んで彼等遊牧民が氏族的社會から部族制國家へと發展して行く過程を攷へ、最後に彼等の有する世界史的役割は東西兩洋の中間に在つて大規模な交易の中繼を行つた所にあると論及され、從つて其役割が近世資本主義國家に取つて代られる所となるや、遂に衰微の一路を辿るに至つたと説く。要するに此の讀本に於て、遊牧民と農耕民とは其比較に於て前者が假令後進的停滯的であるとしても、それは生活樣式の相違であつて、これを以つて野蠻低級とのみ考へることは出來ないと云ふ點に重心を置き、蒙古史に對する氏の抱負の一端を披瀝して、讀者に對し新しい認識を促したものであつて蓋し近來の上乘なるものとして推奬する。猶、志田氏の論文は支那史上に見える勒勒と云ふ部族は丁零・突厥など、共に Türk と云ふ音をうつしたもので、トルコ民族に屬するのであるが、其住地は漢代南北朝時代を通じて、バイカル湖の南セレンガ河流域であつた。然るに五胡十六國時代には一部のものが支那内地に來り河北地方に於て政治的活動をなし當代の北支那政局に大なる影響を與へて居ることを論及したものである。但し憾むらくは更に一歩突進んで極むべき點の尠からざるを思はしめる。其の著しく平調に墮し、一氣呵成とまで見える文章にも拘はらず、創刊「蒙古學」の卷頭論文としては稍〻貫禄が足りない樣に感ぜしめられるのはあながち評者一人のみではあるまい。以上聊か愚辭を述べてその紹介に代へ、以て榮ある「蒙古學」の誕生を祝すると共に、將來の發展を祈る微意とし度い。（善隣協會發行・價壹・二〇）（小野）

○ J. G. Droysen: Historik, Vorlesungen über Enzyklopädie und Methodologie der Geschichte, herausg. v. R. Hübner.

ランケと共に「歴史の世紀」の誇りを代表すると云はれるヨハン・ゲスタフ・ドロイゼンの勞作は、大別して三つの方面に於いて考へられる。一つは「アレクサンダー大王史」後の「ヘレニズ